

## 中国女性の近代的自我形成と性：丁玲『慶雲里の小部屋で』を中心に

|     |                                                                                 |
|-----|---------------------------------------------------------------------------------|
| 著者  | 相原 里美                                                                           |
| 雑誌名 | 研究論集                                                                            |
| 巻   | 100                                                                             |
| ページ | 135-152                                                                         |
| 発行年 | 2014-09                                                                         |
| URL | <a href="http://doi.org/10.18956/00006045">http://doi.org/10.18956/00006045</a> |

## 中国女性の近代的自我形成と性

— 丁玲『慶雲里の小部屋で』を中心に —

相 原 里 美

### 要 旨

丁玲は1929年初めに短編小説『慶雲里の小部屋で』を発表した。この物語には、阿英という妓女の一日の生活や内面世界、妓楼での人間模様が詳細に描かれている。ここには、当時の妓女を主人公にした小説としては珍しく、女性の悲壮感や絶望感、あるいは娼妓制度への憤りなどが前面に描かれているわけではない。むしろ、阿英は妓楼での生活に満足しているかのようには描かれている。その一方で、阿英は故郷の陳老三のことを思い出し、彼の元へ帰ることを何度も夢想するのだが、結局妓楼に残って妓女として働くことを選択する。

本稿では、阿英を通して語られる女性の内面世界から、中国女性の近代的自我形成と性についての分析を試みたい。

キーワード：『慶雲里の小部屋で』、妓女、性、自我の解放、自立

—

丁玲は1929年初めに『慶雲里の小部屋で』という小説を発表している。この物語は、娼妓の一日の生活、妓楼での人間模様が描かれている短編小説である。

主人公の妓女阿英は、慶雲里の妓楼に来て生計を立ててもう三年余りになる。物語は、阿英が客を送り出すところから始まるのだが、彼女の周りで日頃起きている出来事について、第三人称で客観的に淡々と語られていく。そこには、阿英が妓女として生きていることの苦悩や悲哀、妓女という立場から一刻も早く抜け出したいと願う心情などが表現されているわけではない。むしろ、阿英は妓楼での生活を受け入れ、ひいては享受しているかのようには見えぬ。

董炳月や唐利群、李蓉<sup>1)</sup>が指摘しているように、妓女を主人公とした作品としては珍しく、そこには、たとえば老舍の『三日月』(1935)や曹禺の『日の出』(1935)に描かれているような、娼妓として生きることの残酷さや悲惨さ、娼婦自身の悲愴感・絶望感といったものが前面に描き出されているわけではない。

袁良駿は、この『慶雲里の小部屋で』について、次のように述べている。

丁玲のこの『慶雲里の小部屋で』という作品は、一見したところあたかも娼妓制度を美化しているかのようにも見える。小説の主人公である妓女の阿英はまるで無感覚で、自分の娼妓生活に十分満足しているようだ。小説中のやり手婆にもまだ良心が残っているようで、阿英に対して怖い顔で声を荒げることもないばかりか、却って話が「ことのほかよく合う」のだ。この耐えられないほど不潔な下等妓楼でわずかばかりの人間らしさが残っているかのようにだ。しかし、前述したように阿英は自己の貧農である夫の陳老三を非常に恋しがっており、夢の中でさえ彼と相まみえている。このような単純なプロットが表しているのは、作者が妓女生活を決して賛美しているのではなく、冷静かつ客観的に妓女の生活を描き出し、彼女たちの矛盾した心理、ひいては変態心理について描き出すことで、一層深く娼妓制度を鞭打ち、さらに娼妓制度が社会経済の財源になっていることを暴き出している。<sup>2)</sup>

袁によると、この物語は、妓女としての生活に満足しているように見える主人公阿英や、妓女に対して声を荒げることもなく却って意気投合しているやり手婆の存在により、一見すると娼妓制度を美化したように見えている。しかし、阿英が故郷の陳老三<sup>3)</sup>に思いを馳せ、何度も夢想する様子が描かれていることから、決して娼妓制度を美化しているものでなければ、妓女の生活に賛同しているわけではないことが分かる。

たしかに、丁玲は娼妓制度を推奨するために、この小説を書いたわけではない。しかし、ただ単に娼妓制度を痛烈に批判するために描かれたわけでもない。冷静かつ客観的に描かれた阿英たち妓女の「矛盾した心理」や一般の道徳観とは反する「変態心理」は、いったいどんな意図で描かれ、何を意味しているのだろうか。

そこで、本稿では、妓女たちの内面世界や妓楼での人間模様を描いた丁玲の『慶雲里の小部屋で』執筆の動機に迫りたい。

## 二

この小説の舞台となっている慶雲里の妓楼は、妓女が阿英と「大阿姉」、「阿姉」の3人、やり手婆の「阿姆」、女中の「娘嬢」、手伝いで阿姆のおいの「相幫」のみが生活する小さな妓楼である。環境はあまりよくなく、下級妓楼であるといえるだろう。

阿英の部屋の蚊帳は、もともと白色であったが、今はもう灰色に劣化してしまっている。男性客が帰ったあと、改めて寝床の蚊帳の天井を見上げると、新しいシミが増えている。それは、紛れもなく男性の射精の跡で、それが天井に2カ所と枕の横にも1つ増えていた。枕を裏返そうとしたが、結局、その裏にも前の客の跡が残っている。枕を交換したり、洗ったりした形跡

はなく、そのようなシミが増え続けているような部屋なのである。しかも、隣での会話や性行為の声も筒抜けである程、壁は非常に薄い。彼女たちの使用する桂花油は安物なので、髪の毛も梳かしくく、異臭を放っている。客を引き寄せるために施す化粧の粉も粗く、鏡も壊れているのでまくはたけず、お互いに確かめ合いながら化粧をするほかない。さらには、阿母は自分では肉料理を食べているにも関わらず、阿英たち妓女には太るという理由をつけて、肉を食べさせない。

阿英たち妓女は、以上のような環境の中で生活している。しかし、このような生活環境に身を置いているにも関わらず、妓女たちはそのことについて苦痛に思ったり、不満を漏らしたりする場面は描かれていない。ただ客観的にその事実が淡々と語られているのみである。それどころか、妓楼における温かみを感じる場面が随所に描かれている。

次の場面は、阿英と阿母、娘嬢、相幫の関係がどのようなものかが伺える場面である。

阿母がまた怒鳴りに走り寄ってきたので、彼女（阿英）はやっと物憂げに身体を起こし、わざと言いがかりをつけて、阿母に椅子の背もたれに掛けてある花柄のチャイナドレスをとってほしいとなぶった。阿母は彼女がよく稼いでくれるため、特別に甘やかすところがあった。ドレスを阿英に手渡す際、却ってひどい顔を阿姉に向けた。

彼女が客間までやって来たとき、娘嬢はわめき散らしていた時の勢いはとっくになくなっていた。空豆をむきながら相幫とあかんべえをしてわざと声を揺らせて言った。

「私たちのお嬢ちゃんはきれいだよ、私たちのお嬢ちゃんの愛のお蜜はなんてすごいんでしょう…」

相幫はきわめて軽薄な視線で彼女を見て笑った。彼女は娘嬢の身体に飛びかかっていった。娘嬢は「あらら」と笑い出した。彼女は娘嬢をくすぐった。娘嬢はくすぐったがり屋だから、やっと謝った。彼女は許して、隣に座って空豆を剥き始めた。<sup>4)</sup>

阿母は阿英たちがなかなか起きてこないことにしびれを切らしてやって来て、彼女たちを叱りつける。阿英たちは、阿母に謝ることもなければ、恐怖で萎縮することもない。それどころか、阿英が椅子の背もたれに掛けてある服をとってくれるよう頼むと、阿母は素直に従って手渡してくれる。稼ぎ頭の阿英に対しては、阿母は非常に寛容な態度をとるのだった。また、阿英と娘嬢や相幫との関係も悪くない。娘嬢が阿英をからかったかと思うと、阿英も負けまいと娘嬢をくすぐって、娘嬢に謝らせ、そうして豆を剥くのを手伝った。

この場面に対して受ける印象は、妓楼での出来事のように到底思えず、まるで一家団欒の一面を見ているかのようなものである。

さらに、以下は阿母が阿英の髪を梳かしつける場面である。

阿母は彼女がぼーっとしているのを見て、彼女に髪を梳かしなさいと言った。

彼女は櫛をとりだし、髪をほどいた。髪は長くて、多くて、黒くて、まるで水蛇のようで、手からするすると滑っていった。髪の毛の匂いが安物の桂花油の香りと混じり合って、四方に広がった。彼女の髪はなかなか梳かしにくかった。油をたっぷり塗っても、よく引かかるのだ。阿母は見かねて、彼女の代わりに梳かしに来た。彼女は陳老三に嫁ごうなんて考えるべきじゃないなと思った。阿母は殴らないし、怒鳴りもしない。客がない時でも阿母はいつも笑って、「まあいい、あんたも休みな」と言ってくれる。彼女は鏡に阿母の顔が自分の頭の上にあるのを見ると、顔はとがっていて、まぶたには大きな傷跡があり、眉根をわずかにしかめていた。<sup>5)</sup>

阿母は阿英に髪を梳くように促し、彼女も梳かし始めるのだが、なかなかうまくいかない。それを見かねた阿母は、まるで母親が娘にしてやるように、阿英の髪を自ら梳かしてやるのだ。阿母は阿英を殴ることもないし、罵ることもない。客が来ない時でさえも、収入が得られないといって嘆いたり、妓女に当たり散らしたりすることもなく、「休めばいい」と笑って優しい声をかけてさえてくれる。特に何か不満があるわけでもないし、むしろ阿母に思え感じているかのようだ。自分の頭の上に映っている鏡の中の阿母は、顔がとがっていて、まぶたに大きな傷跡があり、眉毛を少しひそめていた。そこには、稼ぎの良い阿英の機嫌をとりただけの阿母の姿はない。むしろ自分の娘を見るようなまなざしで阿英に接しているかのような印象さえ与えている。阿英にとっても、年老いた母親を見ているかのようで、阿母を哀れに感じているのかもしれない。そこで阿英は陳老三に嫁ぎたいと思うべきでないと考えたのだ。それは、今の妓女として阿母たちと共に暮らす生活と嫁として陳老三と暮らす生活を天秤にかけた時、阿英は今の妓女生活の方が良いと感じているからであろう。

では、実際当時の妓楼におけるやり手婆と妓女の関係はどのようなものであったのだろうか。Christian Henriotの『上海妓女』(2004)には次のような記述がある。

買われてきたにせよ、かどわかされてきたにせよ、高級妓楼で調教されてきたこの若い娘たちは、実際にはやり手婆の奴隷となる。普通の妓女であろうと高級妓女であろうと、彼女たちは厳格に監視され、自分の身体と財産の自由を完全に奪われていた。やり手婆や女中の付き添いがなければ、外出することも許されなかった。唯一許された遊歴であっても、彼女たちの職業活動の範囲内でなければならなかった。高級妓女であっても自分の稼いだ金を自由に扱うことは許されなかった。もしその娘が「奴隷」であったとしたら、彼女の得た正式な収入はすべてやり手婆の懐にしまわれてしまう

のだった。<sup>6)</sup>

どのような形で妓女になったとしても、高級妓楼で教育を受けた若い女の子はみんなやり手婆の「奴隷」となっていた。普通の妓女であれ、高級妓女であれ、彼女たちには自由に身を置く場所も財産もなく、一人で自由に外出することなどできるはずもなかった。

一般的な妓女に対するイメージは、まさにこのような妓女であろう。高級妓楼であってもこのような状況であったのなら、まして下級妓楼であれば、さらに劣悪な状態であったことは、容易に想像できる。たとえば、曹禺は『日の出』の中で、妓楼の小部屋を「鳩籠」、妓女たちのことを「血の気を失った動物たち」と形容している。また妓楼に連れて来たばかりの小東西（小翠）が客をとることを拒むとごろつきの養父（黒三）に殴られ、客に誤ってお茶をこぼしかけてしまった時には、鞭で打たれている。

では、慶雲里の妓楼には、なぜこのような搾取された妓女が描かれていないのだろうか。妓楼での人間関係に温かなイメージを持たせているのだろうか。秦林芳は次のように解釈している。

丁玲がこれらの人物関係についてのイメージ描写において、はっきりと浮かび上がらせているのは、人と人の間の「温情」である。またこのような「温情」は、まさに主人公の阿英が「他人の干渉を受けない自由」を享受する前提となっており、同時に「自由」な状態に置かれている表れの一つである。<sup>7)</sup>

つまり、阿英と阿媽、阿英と娘嬢と相幫、阿英と妓女たちの間にはそれぞれ「温情」があり、誰かが阿英に対して絶対的支配権を有しているわけではない。それぞれが互いを思う気持ちを持っており、一定の距離を保っている。秦はそれを阿英の「他人の干渉を受けない自由」と表現している。もちろん、実際は阿媽がこの妓楼を取り仕切っているのは間違いないだろうし、娘嬢が阿媽と取り分のことで言い争っている様子が描かれていることから、阿媽がこの妓楼で支配権を握っているのは間違いない。しかし、阿英に対しては、その支配権を行使することなく、ある程度阿英のやりたいようにやらせているのだ。

一般の道德規範に逆らってまで、妓楼での人間関係があまりにも良く描かれているということは、そこに必ず何か意図があり、何かを示唆しているのである。阿英は、貧農の陳老三がいる田舎から、この慶雲里の妓楼にやってきた。秦の解釈のように、妓楼での生活が「自由」なものであるとするならば、逆に言えば、阿英が妓楼に来る前の暮らしには「自由」がなかったことを示唆している。しかも、それはおそらく「精神的な自由」であろう。これまで女性は嫁に行く前であろうと、嫁に行った後であろうと、精神的な自由などなかった。それは、生まれ

てからは父に従い、嫁いだら夫に従い、夫の死後は子に従うという「三従四徳」の教えを忠実に守らされていたためである。丁玲は、妓楼に敢えて「温情」を与えたことによって、家長により干渉し束縛されている女性にはない、誰にも干渉されない精神的な自由を持ち合わせているということを表現しているのである。

### 三

丁玲の処女作である『夢珂』（1927）の中にも、「妓女」に言及する発言がいくつか描かれている。

「昨日階下で見つけたあの古い雑誌で語られている女性に関する多くの問題の話、あなたも見たんじゃないの？ 本当に正しいと思うわ。特に旧式の婚姻状態にある女性について語っていたけど、嫁に行くってことも、売春することと同じなのよ。ただ安値なだけで、しかも丸ごと……」<sup>8)</sup>

「神経過敏だなんて言わないでね。ほんとおかしいったら、私も二十歳を過ぎていて、しかも麗麗もいるんだから、やっぱり分に安んじて生きていくべきなんだけど、でも時々、こんなふう幻想してしまうの。自分の運命をもっと悪くしてやろうって、取り返しがつかなくしてやろうって。今なんか、娼妓のほうが私なんかよりいいんだから！ ほんと羨ましいくらいよ！……」<sup>9)</sup>

これらは、夢珂の従兄が家に帰ってこなくなって五日目の晩に、兄嫁が発した言葉である。彼女は、旧式の結婚をした女性は、嫁に行くことがすなわち身体を売ることと同じであると感じているのである。さらに、妓女の方が嫁の立場にある自分よりもずっといいとさえ言うてのけてしまう。これは何も本当に妓女を羨んでいるわけではない。主婦が妓女よりも幸福でもなければ、妓女が主婦よりも幸福であるのではなく、主婦であれ妓女であれ、どちらも苦痛を抱えて生きているのだ。韓苒によれば、彼女たちが羨んでいるのは、妓女の生活方式ではなく、妓女が都市に生きる「自由の度合い」にあるという。

彼女たちが羨んでいるのは決して妓女の生活方式ではなく、妓女が都市で生きている自由の度合いにある。20世紀初め、妓女は自分の生活について比較的大きな自主権を有していた。彼女たちが社会に参加する程度は一般女性とははるかに比べものにならず、ひいては都市の中で最も早くに現れた「職業女性」の一種とみなすことができ、

夢珂の従兄の嫁たちが極端な語りで表現したのは、女性の自由と解放に対する要求であり、自身の運命を掌握したいという渴望である。<sup>10)</sup>

当時の妓女が実際に本当に自由であったか、どれほど自由であったかについては、妓楼の等級や地域によって異なっていたはずである。しかし、伝統的家庭という「檻」の中に閉じ込められ虐げられてきた兄嫁にとっては、自分よりも妓女の方が、よほど「自由」であると感じられたのである。自分の意思で動くことも許されず、たとえ夫が浮気をしようとも、黙って耐えるほかないのである。妓女の生活は家庭や夫に縛られることがないため「自由」であり、妓女は自分について自由に決定できる「自主権」を有しており、そして家庭の主婦よりもはるかに社会に参与しているように、兄嫁の目には映る。さらに言えば都市で最も早く現れた「職業女性」の妓女たちには、自活できる「経済力」があるのだ。

丁玲は極端な語りで、女性が自由と解放を手に入れるために必要な「自主権」と「経済力」を妓女が持ち合わせていることを示し、通常では羨むべき対象ではない妓女を敢えて羨ませることで、女性たちの自分の運命を掌握したい、自我を解放したいという渴望を表現したのである。

また、劉伝霞によると、丁玲が妓女を形象化する際に焦点を当てているのは、「中国封建社会の抑圧的に女性の身体と情感を奪う性別制度、とりわけ婚姻制度」<sup>11)</sup>であると述べている。

このような婚姻制度の中で、社会が女性に男性と同等の生活資源権を与えていない場合、相対的に言って、家庭倫理構造の外に追いやられた妓女、とりわけ社交界の花は、却って自身の身体と情感に対する一定の自主性が与えられている。(中略)

しかし、(中略)女性が売春活動をしているときに得られる自分の身体に対する自主権や支配権は一種の幻覚である。売春活動は女性にとって健全な人格や完全な自我を形成するにあたり、きわめて大きな破壊をもたらし、甚大な侵害と自我分裂及び歪曲をもたらすのである。<sup>12)</sup>

丁玲が、女性の健全な人格形成に悪影響を与え自我分裂に陥る可能性のある妓女を、敢えてよく見せているのは、女性が自分自身の「身体」、つまりは「性」に対する自主権を掌握したいという渴望を表すためである。自ら主体的に「性愛」への欲求を満たすという自主権が与えられているのは、当時の女性の中では、妓女だけなのだ。旧式の結婚家庭においては、何をするにも夫が主導権を握っているのであって、とりわけ「性」に関してはなおさらである。妻側から性的快楽を求めることは許されることではなかったし、まして、夫側からの性的欲求を拒否する権利など与えられてこなかった。「自我」に目覚めた女性にとって「性」の解放は、「近

代的自我」を形成する過程で大きな一歩となるのである。

『阿毛姑娘』(1928)の主人公の田舎娘である阿毛は、結婚するとはどういうことか理解していなかったが、周りの勧めによって結婚した。結婚初夜はまさか夫に抱擁され接吻されるとは知らず泣いて過ごしていた。しかし、次第に慣れてくると、初めは怖かった夫の愛撫を素直に受け入れられるようになり、ひいては興奮すら覚えるようになってきた。そして、欲求に耐えきれず、とうとう自ら裸になり寝ている夫を起こそうとすると、「この恥知らずの淫乱女めっ！」と罵られ殴られた。阿毛は自ら「性愛」への欲求を満たそうとしたのだが、旧式の婚姻関係において、それは決して許される行為ではなかったのだ。

次に見るのは、阿英が客引きをして、性行為に及ぶ場面である。

ただ一度だけ、二時を過ぎた頃、彼女が家に戻って寝ようと思った時、突然洋服を身にまとった若者がよろよろと彼女の後ろにいるのを見かけたので、ゆっくり歩いて彼の手を引くと、彼は黙って彼女のあとをついてきた。娘嬢は彼が馬鹿だと笑い、阿媽も笑って、自分でもおかしかった。夜、彼は彼女を抱き、全身に口づけしようとしたので、彼女は拒絶した。彼女が彼の手を握ったとき、その手はとがっていて、やせっばちで、薄っぺらだなとだけ思ったが、彼の洋服がきれいなこと。<sup>13)</sup>

阿英は、これまでは不潔な客ばかりだったが、身なりのきれいな客を見つけたので、自ら部屋に引き入れた。その客のことを阿媽たちと馬鹿だと嘲り笑った。彼が阿英の全身を愛撫しようとしたが、それを拒否した。この夜、阿英はその客に主導権を握らせず、あくまでも自分のペースに引き込もうとしている。ここで描かれているのは、阿英が自ら「性」の対象を選び、「性愛」について主導権を握っていることである。

『莎菲女士の日記』(1928)の莎菲は、「性愛」を求める「本能」と社会規範を守ろうとする「理性」との間で常に葛藤していた。莎菲は、女性の側から性愛への欲求を満たそうとする行為が社会的規範に反していることが分かっていたため、本能的な欲求は日記の中だけでしか語ることができなかった。実際はやはり凌吉士が主導権を握っていたのである。だが、矛盾の「莎菲は時代の苦悩を負った若い女性の反逆の絶叫者であった」<sup>14)</sup>という評価を見てもわかるように、日記での語りであっても、女性の側から性愛への欲求を満たそうという気持ちが赤裸々に語られたことは、当時の社会に大きな反響をもたらした。しかし、丁玲の「性の解放」に対する衝動や社会規範に対する反逆精神は、莎菲を描くことだけでは留まらなかったのだ。阿英が「性愛」において「理性」的に行動を抑制することはなく、「本能」のままに振舞い、主導していくという形で表現されているのである。当時の女性のなかでは、妓女だけしか理性に囚われることなく「性愛への欲求」を満たすことを体現できなかったのである。

#### 四

そんな「自由」であるはずの阿英であったが、何度も故郷の陳老三の元へ戻ることを夢想するのであった。

夢の中で、彼女（阿英）はすでに家に戻っていた。陳老三が彼女を抱き締めているが、これまでと違って力強かった。阿英は、彼が他のどんな男よりもよく、彼女を気持ちよくしてくれると思った。そんなことは、以前彼女が家にいた時には感じられなかったことだ。彼女は、彼にたくさんの紙幣をやった。それは全て十元札で客にもらったものもあれば、賭博で勝ったものもあった。彼女はそれを全部彼にやった。彼女は彼と二人で、静かに田舎で一生を過ごしたかった。

夢の中で、彼女は満ち足りていた。彼女はたくましい二本の腕を握りしめ、心は躍りあがりそうだった。しかし、どうしてだかわからないが、陳老三がゆっくりと遠くに行ってしまったと思ったら、今度は阿媽の怒鳴り声が聞こえてきた。嬢嬢も大声でわめいていたので、彼女はまた起こされてしまった。<sup>15)</sup>

彼女は故郷を離れて三年あまりになる。陳老三は夢の中のようにならなうか。もし彼女が上海でこんなことをして生きていたら、以前のように彼女と仲良くしてくれるとは限らない。ひょっとしたら彼女のことはとっくに忘れて、もう嫁をもらっているかもしれない。そこで彼女は明日早めに起きて、向かいのあの文字占い師に手紙を書いて聞いてもらおうと決めた。どうしてもっと早く手紙を書いてもらわなかったのかと後悔した。しかし、考えてみれば、彼女には以前はお金がなかったのだ。お金のことが頭に浮かぶと、自分が貯めた財産についてまた密かに計算してしまう。もともと六十元あったのが、昨日の毛むくじゃらの手の人がくれた五元に、この三日間博打で勝った八元を足して、全部で七十三元。あの指輪はいくらにもならないが、あの真珠は良い代物で、二十元はくだらないし、それにあの金のネックレスが十六元だから、三十六元になる。しかも、何日かしたらあのお人好しにせびろう。もし陳老三が本当に来るなら、他のところからもう一度案を練ろう。彼が百元、二百元有れば十分だろう。ただ……<sup>16)</sup>

夢の中には、阿英が理想とする陳老三の姿があった。彼女を強く抱きしめてくれ、どんな男よりも満足させてくれるのだ。これは今まで感じたことがなかったことである。阿英は陳老三にお金を渡す。それは彼女が客からもらったものであったり、賭博で勝ったりしたお金であっ

た。それらを全て彼に渡して、故郷で二人静かに暮らすのを夢見るのである。

この夢から読み取れることは、阿英が妓女になる前の生活は、夢のようではなかったということである。陳老三が強く抱きしめてくれることもなければ、満足させてくれることもなかった。彼は朝から晩まで働いているため、阿英は夜一人で寂しく過ごさなければならなかった。貧しさゆえに、一人の妻も養うことができず、阿英を妓楼に売り飛ばした可能性もある。だからこそ、自分で稼いだお金を使って、陳老三に自分を買い戻してほしいと願うのだった。

この夢について、李萱は次のように解釈している。

小説冒頭の「夢の境地」は、楽しく愉快なものであるが、夢の境地と現実の対比は残酷なものであり、「夢」という潜在意識の心理状態についての描写を通して、作者は、結婚するかあるいは妓女を続けるかという阿英の矛盾した心理を示した。そしてその後阿英と周りの人が関わっていく過程で絶えず湧き出てくる「瞑想」は、阿英の自我分裂、自己修復、そして自己欺瞞、及びこの過程の中で生まれた妓女を続けていくという硬い決意とそのやるせなさを、さらに露呈したのである。

実際、素晴らしい結婚を夢見ている阿英と現実に妓女をしている阿英は、それぞれ彼女に内在する分裂した「自我」の両極をなしている。「夢の境地」の中の阿英は理想の「自我」であり、妓女としての阿英は現実の中のやるせない「自我」である。<sup>17)</sup>

たしかに、阿英にとって「夢の境地」の中の自分が理想の自分であることは間違いないだろう。しかし、その対極にある現実には、妓女として働く阿英だけではない。もう一つ見落としてはならない現実がある。それは、妓女として働く以前の阿英の生活であり、現実の陳老三である。これまで陳老三が阿英に性的な満足を与えてくれることもなかったし、阿英を取り戻すために大金を出してくれることなどあり得ないのだ。妻として性的快楽を得ることもなければ金銭的な余裕もない現実の生活も、夢の対極にあるもう一つの現実である。

阿英が、本当になりたいものは実は「嫁」でも「妓女」でもどちらでもない。実現できるはずもない夢と現実を行ったり来たりすることが、その心の葛藤の表れである。どちらにもそれぞれ「苦痛」があるからだ。それでも、敢えて選択するならば「妓女」である。なぜなら、農村での伝統的な結婚生活のなかに、彼女が求めるものは何もないからだ。女性から性愛への欲求を満たすこともできなければ、貧困のためにまともに生活していくことさえままならない。阿英にとっては、妓女として生きることで、男性に頼ることなく、独立した個人として「自立」できるのだ。

「夢の境地」で最も注目すべき点は、「夢」の中で常にお金について言及している点である。それは全て阿英自身が身体を売って稼いだお金や自分が賭博で勝ったお金、自分でため込んだ

お金である。阿英が自分で稼いだお金を夫の陳老三に渡す行為こそが、女性の経済的自立の重要性を物語っている。

水田珠枝は、女性解放に必要な要素として次のように述べている。

その後の歴史の過程でも、性の解放や自由恋愛はくりかえし主張され、しばしばそれは、女性解放と同義語とみなされてきた。それほどこの問題は、女性解放思想のなかでは、おおきな意義をもっている。というのは、女性への抑圧は、性や愛情つまり人間の本性そのものへの抑圧であり、この抑圧をとりのぞくことは、家長中心の家族制度を否定し、女性の人格的自立を実現するという、女性解放の基本的課題とつながっているからである。しかしもっと重要なことは、性や愛情の解放だけでは、女性解放が実現されなかったということである。生活手段をみずからの手ににぎらないかぎり、女性は性や愛情をも自分のものとすることができない。<sup>18)</sup>

丁玲も「性や愛情の解放」だけでは、女性を解放することができないと感じていたのではないだろうか。丁玲の母親は、父親が亡くなってから学校へ通い、教員となって丁玲を育てた。母親の背中を見て育った丁玲なら、女性が男性に頼らず経済的に自立していくことの困難さを誰よりも知っていたに違いない。当時の女性が従事できた仕事というのは、女工や教師など限られたものしかなかった。張百慶によると、「大量の婦女が工場で女工をすることは難しく、労働力を売ることで生活を維持できない場合、残された者は身体を売るしかなかった。(中略) 1915年の各省の女工の給与平均は、1日1～2角で、数分の場合もあり、男性労働者の半分であった」<sup>19)</sup>という。たとえ運よく女工になれたとしても、自活できるほどの稼ぎはなかった。女工になれなかった者は、生きるために身体を売らざるを得なかったのである。

経済的に自立できていた阿英が、それでも何度も「夢の境地」に向かうのは、現実に妓女として生きることに「苦痛」を感じていたからだ。妓女という仕事は、自分に「性」に対する自主権を与え、経済的に自立できる仕事だとしても、これまでずっと従ってきた道德規範には違反しているし、この先ずっと続けていける仕事でもない。夫に家族を養うだけの稼ぎがあるとすれば、自由がなく虐げられ精神的に解放されることがなくとも、必要最低限の生活を送ることができるからだ。

伝統的家族の中で自分の意志も持たず男性に従属して生きていく方がいいのか、それとも解放を求めて家族を飛び出し生きていく方がいいのか。そのことに関連して、水田は次のように述べている。

家父長的家族の崩壊に直面した女性も、同様に、解放と生活の危機の両方を経験し

たのである。しかし、女性の立場が農民の立場とちがうところは、女性たちは、既存の家族制度に満足していなかったにしろ、ほとんどすべてが家族制度を肯定し、それにすがって生きようとしたことであつた。<sup>20)</sup>

自我を解放することもできず、社会からも隔離された家父長的家族という「檻」の中で生きてきた女性たちが、ひとたびその「檻」から解き放たれ、社会に飛び出し「自由」を得た途端、自立して生きていくことの困難さに直面するのである。自我を解放したいと願う女性が、自活できる職業がほとんどないなかで、家父長的家族から社会に飛び出したとしても、結局は身体を売るか飢え死にするかしかないのである。精神が満たされる前に、生命の危機に晒されるのである。その苦難と貧困に比べると、無自覚に自我を解放することなく伝統的家族に「すがって」生きていく方がどんなにか楽かという、まさに心の葛藤がそこにあるのだ。けれども、自我を解放したい女性にとっては、伝統的な家父長的家族にはやはり戻りたくないという意識が働き、その心の葛藤が終始繰り返されるのである。

今朝の夢は、全部忘れた。それは彼女にとって無益だ。彼女はなぜ嫁に行かなきゃならないのか。食うにも着るにも困らず、何も心配することはない。阿母が全部負担してくれるじゃないか。夫が欠けているとはいえ、夜な夜な無駄に過ごしているわけではない。しかももっとおもしろく感じられるのは……彼女は何もしなくていいことだ。ただ男に寄り添って眠るだけだ。でもこれは難しくも何ともない。もう慣れっこだ。笑顔を作って知らない客を引っ張ってくるときも全然恥ずかしくない。今彼女は、逆に恐れているのだ。かつて妻であつたこと、またその妻の身に案ずる生活を渴望していたことを。<sup>21)</sup>

阿英は、以前自分が農村で暮らしている時には、陳老三が貧しさゆえに朝から晩まで働いて、夜も寂しい思いをさせられていた。しかし、今は阿母が一切を負担してくれていて、食べる物や着る物に困ることはない。ただ単に男性客と夜を共にしさえすれば、生活の何もかもが補償されている。夫がそばにいたくとも、夜は寂しくないのだ。かつて家父長的家族の中で、自分の意思を持つことも性的快楽を求めることも許されず妻として生活をしてきたことが恐ろしくさえ感じている。

丁玲は、阿姉にも「本当に決めかねるわ。嫁に行った方がいいのか、それとも仕事を続けた方がいいのか」<sup>22)</sup>と悩ませている。もし結婚生活に不満や不安がないのであれば、悩む必要はない。阿姉の相手は妓女に貢ぐ金があるほどだから、結婚したとしてもかつての阿英のように衣食に困ることはないだろう。しかし、阿姉には、女性が結婚した途端に伝統的家族という

「檻」の中に閉じ込められ、夫に従属して生きていかなければならないことが分かっているのだ。彼女にとって嫁入りとは、これ以上身体を売らなくて済むかわりに、これまで手に入れていた「自由」を手放してしまわなければならないことを意味している。もちろん、妓女として身体を売って生きることは、社会規範に違反していることも阿姉には分かっているのだ。だからこそ葛藤するのである。

一方、阿英の場合、陳老三に嫁ぐとすれば、さらに貧困の問題が残っている。だから物語の最後であっても阿英はお金の計算をしている。

彼女はやっぱり出かけて行くと言い、一晚五元が無理なら、三元や二元でもかまわない。無駄に一晚を過ごすよりは、と言った。それは阿姉のために言ったものだから、阿姉はこの子はなんていい子なんだ、物わかりがいいと、喜んで承諾した。ただあまりにも出鱈目な奴はやめるよう言った。所詮二元稼げないくらいどうってことないと。<sup>23)</sup>

阿姉は、昨夜来た毛むくじらの手の男は地元の客だからきっと今晚も来るだろうと、阿英を客引きに行かせず、妓楼に待機させていた。しかし、阿英はその男が二晩続けて来たことがないし、一晚中一人で隣の声を聞き続けることは嫌だったので、結局客引きに出ることにしたのだ。一晚で5元稼げなくとも、2元3元でもいい。無駄に一晚過ごすよりもずっといいと考えるのだ。

当時の女性にとって、経済的自立が如何に困難であり、「自由」を手に入れるためにはそれが如何に重要であるかがここに示されているのである。

## 五

老舎は1935年に『三日月』という中編小説を発表している。この小説に描かれているのは、貧困のために妓女として働き生計を立てていかなければならなかった母娘の悲劇である。この主人公の「私」は、身体を売って自分を育てた母親のように絶対になりたくないと思っていたが、結局生きていくために自分も母親と同じ道を辿らざるを得なくなってしまった。年老いてしまった母親も生きていくために、娘に「こんな商売やめなさい」とは言えなかった。病気に罹ってしまった主人公の生きる苦しみは次のように語られている。

私はおかしくもないのに笑ったり、わざと狂人のように振舞ったりした。私の苦しみは到底数滴の涙などで救われるものではない。私のこのような生命など少しも惜し

いとは思わないけれど、それでも生命は生命であって、そう簡単に捨てられるものではない。私の行為は私の過ちではない。死が怖いのは生に執着があるからだ。私は決して死を恐れない。私の苦しみはつとに死以上である。私だって生きていたいとは思っているけれど、このような生き方で生きたくはない。私は理想の生活を夢見たことがあるが、夢は忽ちはかなく消えて、現実の生活が一層烈しく私を苦しめた。この世は夢の世ではなく、本当の地獄なのだ！

母は私が苦しんでいるのを見兼ねて、嫁入りすることを勧めた。私が嫁に行けば食うに困ることもなく、そのうえ幾らかの養老金も貰えるだろうといった。私は母の唯一の希望なのだ。だが、私はいったいどこに嫁入りすることができるだろう？<sup>24)</sup>

たとえ自分の力で生活ができるとしても、妓女として生きる苦しみは死以上であり、地獄の中で瀕死の状態で生きているのと同じである。そうなれば、もう死ぬことさえも恐くない。そんな地獄で生きていくよりは、嫁として生きていくほうが最低限の生活が保障されている。だから母親は娘に嫁入りを勧めた。娘が嫁に行けば、自分も生活ができるお金が手に入るのだ。李蓉は、『三日月』を『慶雲里の小部屋で』と比較して以下のように評している。

『三日月』において、女主人公の売春生活に喜びや楽しみなどは微塵もなく、苦痛と悲憤のみが描かれており、ここには作家の道德傾向が反映されている。老舎の筆致のもと売春することで主人公の人格が貶められることがなかったのは、女主人公が完全に生存の危機に直面してこの職業につかざるを得なかったためであり、そこから肉体の享樂を得ようとする傾向は存在しないからである。主人公は、肉体は売ったけれども、精神を売ったわけではなく、あのもの寂しく美しい月が十分に女主人公の心中にあり続ける人間性の光を証明している。<sup>25)</sup>

『三日月』には、妓女となった母娘にとって喜びや楽しみは微塵もなく、苦痛と悲憤のみが描かれている。阿英のように、妓女の生活と結婚生活を天秤にかけるようなことは全くない。二人は身体を売ってはいるけれども、精神を売ったわけではない。老舎はそこに二人の人間性が失われていないことを見るのである。

ここに、男性作家と女性作家の見解の違いを見ることができる。老舎にとって、妓女とは最下層に生きる女性であり、もっとも悲惨な存在であるのだ。妓女として生きる世界は地獄であり、苦痛以外のなものでもない。しかし、丁玲は『慶雲里の小部屋で』の中で、妓楼で明るく暮らす阿英という女性を描いてきたのである。

唐利群は、このことに関連して、次のように述べている。

それゆえ創作は一種の主体性の創造活動として、女性の意義について、少なくとも次のような可能性をもたらしたと言える。女性の作品はおそらくこれまで表現されてこなかった自己の体験を広く世に知らしめることができたのだろう。そしてそれらはまさに男性の創作の中では、見落とされ、排除され、拭い去られ、誤解された部分であるのだ。<sup>26)</sup>

真の女性解放とはどういうことなのかを考えた時、丁玲の描いた阿英の内面世界は、見過ごすことのできない真実なのである。丁玲は、最も根源的な女性の渴望を示したのである。それは自我の解放であり、性愛への欲求であり、自由や自立への渴望である。これらを見落とし、誤解したまま女性解放を進めていこうとしても、真の意味で女性を解放することなどできないのだ。それらの欲求を満たすことができるのであれば、たとえ道徳規範に違反する妓女であったとしても、敢えて良く見せて描くことさえできるのだ。丁玲の作品には、男性作家には到底想像できるはずもない女性の内面世界が描かれているのである。

しかし、逆に男性作家が丁玲のように阿英のような人物を描いたとすれば、更なる誤解を生むことになっただろう。男性作家が、妓女という身分を苦痛に思うどころか楽しむ女性を描いたとしたら、それは、娼妓制度を肯定するための口実にしか聞こえないからだ。丁玲だからこそ阿英という妓女の内面世界を描き得たのである。

## 六

丁玲の早期作品（1927年～31年）のなかで『慶雲里の小部屋で』は、代表作である『莎菲女士の日記』や処女作である『夢珂』と比べると、あまり注目されてこなかった。道徳規範上、廃絶すべき娼妓制度を一見すると肯定しかねない作品に映るというのも、原因の一つであろう。作者の意図するところを読み間違えると、容易に誤解を生み、容易に批判の対象となるからだ。

また、丁玲のこの時期の作品は、女性解放や女性の自我形成といった何かを意図して書かれたのではない。丁玲自身が、女性であるがゆえに苦悶してきた様々な事柄に対して、心の奥底からわき起こる衝動に駆られて創作してきたのである。

中島みどりは、「丁玲論」（1981）において、次のように述べている。

丁玲は近代の中国文学の中で「女」の本質について、男女の愛と性のいみについて、最も早くまた鋭く問いを發した作家であった。それがいわゆる政治的社会的な場での婦人解放、婦人の権利獲得といった視点からなされたものではなかったことに私は注目する。彼女の問いは、彼女自身が十分に自覚的であったとは限らないが、人間

の精神と感性の、最も奥深くにおける自由と解放の問題につながる可能性をもっていた。<sup>27)</sup>

中島の指摘のように、この時期の作品において、丁玲は政治家や革命家として何か意図的に社会に影響を及ぼそうという意思を持って作品を執筆していたのではない。彼女の心底には人間としての「自由と解放」を求める感情がふつふつとわき起こっていたのである。丁玲の早期作品には、自覚的にせよ、潜在的にせよ、その彼女の「男女の愛と性」そして「自由と解放」への渴望が描き出されているのである。

阿英が莎菲や夢珂と異なっているのは、まずは人間として生きるために必要な最低限の生活について語られている点にある。莎菲たちは、生活の心配をする必要はなく通常の暮らしができていくという前提のもと、精神的な自由や自我の解放について追及している。

しかし、ひとたびその前提が崩れたとき、男性主導の伝統的家族の中で主体的な意思も持たず男性に従属して生きていくか、どんなことをしてでも自我を解放し経済的にも自立し生きていくという選択に迫られる。それが体現されているのが、阿英の内面世界なのである。

阿英が見る夢は、彼女が理想とする境地であった。そこでは陳老三が強く抱きしめてくれる性的快楽を得ることができる。また、自分の稼いだお金をすべて陳老三にくれてやるのだ。妓女という社会規範に違反した職業なんてやめて、陳老三と平穏に一生を送りたい、それが彼女の願いである。

しかし、現実はその理想とは程遠い。これまで陳老三は彼女を性的に満足させることもないばかりか、貧困のために妓楼に売りとばした。阿英がいくらお金を稼いだところで、陳老三が彼女を買い戻しにきてくれることなどありはしないのだ。たとえ、誰かに嫁いだとしても、それが伝統的家族である限り「他人の干渉を受けない自由」や「性愛に対する自主権」、「経済的自立」を手に入れることはできないのである。

伝統的家族の「檻」の中から飛び出て、外の社会で羽を伸ばしてきた女性たちにとって、もう一度「檻」の中に閉じ込められることは耐え難いことである。ひとたび自我を解放した女性にとって、伝統的家族には戻り難いのだ。妓女となれば、「経済的に自立」でき、「性愛への自主権」を握ることができ、「自我を解放する」ことができるのだ。

しかし、劉（2007）が述べるように「危険なのは、女性の自我主体が分裂し、人間性が歪曲され、物品化され、人の本質の異化と存在の複雑性を作りだしたこと」<sup>28)</sup>である。「性愛への自主権」を握れるとって自己を欺瞞し、自分の性を商品化して、そこで得た金銭によって自立できることが、果たして自我を解放すると言えるのだろうか。

そのような危険が孕んでいることを理解していながら、それでも敢えて倫理的に許されるはずのないこの職業を阿英に選ばせているのは、丁玲が女性であるがゆえに求めた最も根源的な

女性の渴望をそこに示したのである。それは「自我の解放」であり、「性愛への欲求」であり、「自由や自立への渴望」である。この時代の女性にとって、自己を解放して主体的に生きるために必要な経済的自立がいかに困難であったか、性愛への欲求を満たそうとすることが如何に許されてこなかったのか、そのことに対する反逆の精神が示されているのである。これまで男性に見落とされてきた女性の内面世界が阿英という妓女を通してここに表現されているのである。この物語は、女性である丁玲だからこそ、描ききれたのだ。

### 【注】

- 1) 董炳月「男権与丁玲早期小説創作」『中国現代文学研究叢刊』04期、1993年、唐利群「一扇不好打開的門——『丈夫』与『慶雲里中的一間小房里』対読」『名作欣賞』06期、2003年、李蓉「苦難与愉悦的双重叙事話語」『文学評論』第2期、2006年など。
- 2) 袁良駿『丁玲研究五十年』天津教育出版社、1990年、30頁。
- 3) 袁（1990）では、陳老三のことを阿英の故郷の貧農の夫と表現しているが、原作では陳老三が阿英の夫かどうかは言及されていない。阿英の夢の中では、家に帰ると陳老三がいることから、阿英は童養媳である可能性もある。
- 4) 丁玲「慶雲里中的一間小房里」『紅黒』、1929年、（『丁玲全集』河北人民出版社、第3巻）、194頁。
- 5) 丁玲「慶雲里中的一間小房里」、前掲書、195頁。
- 6) Christian Henriot（袁燮銘、夏俊霞訳）『上海妓女——19-20世紀中国的売淫与性』上海古籍出版社、2004年、33頁。
- 7) 秦林芳「『自由』：丁玲早期小説創作的精魂——以『慶雲里中的一間小房里』為中心考察」『中国現代文学研究叢刊』第9期、2012年、68頁。
- 8) 丁玲「夢珂」『小説月報』、1927年、（『丁玲全集』河北人民出版社、第3巻）、28頁。
- 9) 丁玲「夢珂」、前掲書、29頁。
- 10) 韓苒「丁玲女性都市小説論」『西南師範大学学报(人文社会科学版)』第28巻第4期、2002年、137頁。
- 11) 劉伝霞「女性視域中的中国現代妓女叙事——以丁玲『慶雲里中的一間小房里』和張愛玲『沈香屑第一炉香』為例」『遼東学院学报(社会科学版)』第9巻、第4期、2007年、114頁。
- 12) 劉伝霞、前掲論文、第4期、2007年、114-115頁。
- 13) 丁玲「慶雲里中的一間小房里」、前掲書、192-193頁。
- 14) 茅盾「女作家丁玲」、1933年、（楊桂欣編、『觀察丁玲』、大衆文芸出版社、2001年、205頁）。
- 15) 丁玲「慶雲里中的一間小房里」、前掲書、191頁。
- 16) 丁玲「慶雲里中的一間小房里」、前掲書、194頁。
- 17) 李萱「『妓女』: 个体體驗与主体困境——丁玲『慶雲里中的一間小房里』再解讀」『名作欣賞』10期、2009年、59頁。
- 18) 水田珠枝『女性解放思想の歩み』岩波新書（青版）、1973年9月、26頁。

- 19) 張百慶「中国城市早期現代化過程中的娼妓問題」『史学月刊』第1期、1999年、102頁。
- 20) 水田珠枝、前掲書、93頁。
- 21) 丁玲「慶雲里中的一間小房里」、前掲書、196頁。
- 22) 丁玲「慶雲里中的一間小房里」、前掲書、193頁。
- 23) 丁玲「慶雲里中的一間小房里」、前掲書、197頁。
- 24) 老舍「三日月」『国聞周報』、1935年、(竹中伸訳『老舍自選短編小説選』、学習研究社、1981年、37-38頁)。
- 25) 李蓉「苦難与愉悦的双重叙事話語」『文学評論』第2期、2006年、142頁。
- 26) 唐利群「一扇不好打開的門——『丈夫』与『慶雲里中的一間小房里』対読」『名作欣賞』06期、2003年、44頁。
- 27) 中島みどり「丁玲論」『颯風』第13号、1981年、(『頃筐集 中国文学論集』朋友書店、2011年) 124頁。
- 28) 劉伝霞、前掲論文、115頁。

(あいはら・さとみ 英語国際学部准教授)